

Much Ado About Nothing の言葉について

内 山 倫 史

(1)

Much Ado About Nothing の筋は三つあって、第一は、Claudio-Hero の物語、第二は、Beatrice-Benedick の物語、第三は、Dogberry, Verges, Watchmen の物語で、第一と第三の物語を、Margaret-Borachio の物語がつかないでいる。しかし、この作品の魅力は、筋の面白さというよりも、登場人物たちの語る多種多様な言葉の交響曲にある。⁽¹⁾この小論では、*Much Ado About Nothing* の生命ともみられる言葉について考察を加えてみたい。

(2)

Much Ado About Nothing における三つの物語には、言葉の上でそれぞれ際立った特徴がみられる。第一の物語では、Claudio と Hero が極めて抒情的、情熱的な言葉を用い、この作品にロマンチックな恋の雰囲気醸成を醸しだしている。第二の物語では、Beatrice と Benedick の縦横な機知のやりとりにおかしみがあり、第三の物語では、警保官の Dogberry、村役人の Verges、及び夜番の「言葉のこっけいな誤用」(malapropism) が笑いの対象となる。以下、第一の物語から順を追って、それぞれの言葉について考察を加えることにする。

まず、第一幕第一場、Claudio が、Aragon の領主、Don Pedro に、Hero に対する自分の恋心をうちあける言葉をみてみたい。

O my lord,

When you went onward on this ended action,
I looked upon her with a soldier's eye,
That liked, but had a rougher task in hand
Than to drive liking to the name of love:
But now I am returned, and that war-thoughts
Have left their places vacant, in their rooms
Come thronging soft and delicate desires,
All prompting me how fair young Hero is,
Saying I liked her ere I went to wars.⁽²⁾

(1. i. 279-288)

この台詞は、William Hazlitt の言葉をまつまでもなく、「恋心が若者の胸に忍びよるさまを、生き生きと伝えている」が、さらに注目に値することは、これが韻文でのべられている点である。⁽³⁾*Much Ado About Nothing* は、韻文に比べ散文の比率が極めて多い散文優勢⁽⁴⁾

の作品であるが、⁽⁵⁾韻文は主として Claudio と Hero の台詞にあらわれ、この作品にロマンチックな恋の雰囲気を与えているのである。

いま一つ、Claudio の言葉の特徴を示す例として、第四幕第一場、祭壇の場面で、Don John に唆された彼が、Hero を不貞呼ばわりする台詞をあげてみたい。

You seem to me as Dian in her orb,
As chaste as is the bud ere it be blown:
But you are more intemperate in your blood
Than Venus, or those pamp' red animals
That rage in savage sensuality. (IV. i. 58-62)

この言葉も韻文でのべられている。Milton Crane は、激しい感情を表現する一手段として、韻文が極めて重要な役割を演ずることを指摘しているが、⁽⁶⁾ここには、恋人に裏切られたと信じて激怒する Claudio の気持が、ありありと表現されている。さらに、Hero の素振りを見た Claudio が、彼女を「ダイアナ」や「ヴィーナス」というローマ神話の女神にたとえたり、また、貞淑を「まだ綻びぬ蕾」という美しい比喩であらわすことにより、⁽⁷⁾激怒を示すこの台詞にさえ、皮肉にも、ロマンチックな恋の雰囲気がただよっている。

次に、Hero の言葉をもてみたい。彼女も Claudio 同様、殆んど韻文で語っている。第三幕第一場、Hero が侍女の Margaret に、Beatrice を呼びにやる時の台詞をあげてみよう。

And bid her steal into the pleached bower,
Where honeysuckles, ripened by the sun,
Forbid the sun to enter. Like Favourites,
Made proud by princes, that advance their pride
Against the power that bred it. (III. i. 7-11)

ここには、「太陽の恵みを浴び、あづまや一面にはびこる忍冬」という美しい自然のイメージがある。G. Wilson Knight は、美しい自然や、太陽のイメージが、「恋」や「幸福」と密接な関係があることを指摘しているが、⁽⁸⁾上の台詞にも同じイメージがあらわれ、恋の語らいに恰好な背景を提供している。また、「忍冬」が、みやびな「宮廷の寵臣」にたとえられ、台詞全体の醸し出す雰囲気が極めて抒情的で、ロマンチックな恋の雰囲気にふさわしいものになっている。さらに、同幕同場、自分の噂を立ち聞きするため、あづまやへ忍び入る Beatrice を見ると、Hero は侍女の Ursula にむかい、次のように言う。

look where Beatrice like a lapwing runs
Close by the ground, to hear our conference. (III. i. 24-25)

この台詞では「田鳧^(たげり)みたいに地面すれすれに這いよってくる。」という比喩で、Beatrice の忍び寄る様子が、William Hazlitt の言葉をかりれば、「絵のように美しく」⁽⁹⁾

描かれている。また、鳥のイメージ——ここでは「田鳥」——が恋と関係があることは、G. Wilson Knight も指摘しているところである。⁽¹⁰⁾_(大げり)

以上、Claudio と Hero の言葉の特徴をみてきた。両者の言葉はいづれも韻文で語られ、また、分量も作品全体の4程度にすぎないが、作品中に、言わば、音楽のリフレインのようにあられ、甘い恋の雰囲気を醸しだすのに極めて重要な役割を演じている。

(3)

次に、第二の物語の主人公、Beatrice と Benedick の言葉をもてみたい。*Much Ado About Nothing* の魅力の大半は、Beatrice と Benedick の機知合戦にあり、劇中、Leonato も、“There is a kind of merry war betwixt Signior Benedick and her. They never meet but there’s a skirmish of wit between them.” (I. i. 58-60) と言っている。二人のこの機知合戦は、Claudio-Hero の物語が、ともすれば悲劇的になるのを救う重要な役割を果たしている。T. M. Parrott も、「Beatrice と Benedick に言及することなしに *Much Ado* について書くことは、デンマークの王子なしに *Hamlet* を上演するようなものだ。」⁽¹¹⁾とのべている。

まず、Beatrice の言葉からみていくことにする。第一幕第一場の冒頭で、Benedick のことを、「大法螺様」(Signior Mountanto) と皮肉る彼女は、Don Pedro の使者に、戦場における Benedick の活躍ぶりを、次のように尋ねる。

I pray you, how many hath he killed
and eaten in these wars? But how many
hath he killed? for indeed I promised
to eat all of his killing. (I. i. 39-42)

「いかほど殺して召し上ったの？」——この、まるで鳥か獣を仕止めるような表現の中に、Benedick の勇気を嘲弄する Beatrice の機知がうかがわれ、また、「殺す」、「食べる」という言葉の反復により、その雰囲気が強められている。

Beatrice の質問に対する答えとして、使者が Benedick のめざましい働きに言及すると、Beatrice は次のように言う。

You had musty victual, and he hath
help to eat it. He is a very valiant
trencher-man, he hath an excellent
stomach. (I. i. 47-49)

前の台詞をうけて、ここにも「食物」に関する言葉が続き、Benedick の勇気が揶揄されている。「もりもり平げた」のは敵ではなく、くさりかけた食糧である。彼はまた「勇猛果敢な大食漢」と酷評されている。実際、“stomach”という言葉には“appetite”と“courage”

の意味がかけられていて、⁽¹²⁾“he hath an excellent stomach”は「胃の強健な人」と「すばらしい（アイロニカルに）勇気のある人」という二重の意味がこめられているのである。

彼女の機知が一段とうかがわれるのは、第二幕第一場、彼女が「求婚」、「結婚」、「悔恨」について、叔父の Leonato にのべる次の台詞である。

— *wooing, wedding, and repenting, is as a
Scotch jig, a measure, and a cinque-pace: the
first suit is hot and hasty like a Scotch jig, and
full as fantastical; the wedding mannerly-modest,
as a measure, full of state and ancientry; and then
comes Repentance, and with his bad legs falls into
the cinque-pace faster and faster, till he sink
into his grave.* (イタリックは筆者) (II. i. 65-71)

ここにみられる頭韻は言うまでもなく、「求婚」、「結婚」、「悔恨」を、それぞれ、「スコッチ・ジグ」、「宮廷舞踊」、「シンク・ペース」の比喩で説明する巧みに、彼女の溢るるばかりの機知がみられる。

C. F. E. Spurgeon は、*Much Ado About Nothing* の雰囲気、陽気で、きらきらして、機知に富んでいることをのべ、その理由として、この作品の中に、軽やかな音と素早い動きのイメージ、つまり、踊りや音楽のイメージが沢山あることを指摘しているが、⁽¹⁴⁾これらのイメージは、上にあげた台詞のように、Beatrice の言葉にしばしばあらわれ、重要な役割を演じている。⁽¹⁵⁾

最後に、第三幕第一場、Hero と Ursula の話を立ち聞きした後で、Beatrice が自らに語る言葉をみてみたい。

What fire is in mine ears? Can this be true?
Stand I condemned for pride and scorn so much?
Contempt, farewell! and maiden pride, adieu!
No Glory lives behind the back of such.
And, Benedick, love on, I will requite thee,
Taming my wild heart to thy loving hand:
It thou dost love, my kindness shall incite thee
To bind our loves up in a holy band:
For others say thou dost deserve, and I
Believe it better than reportingly. (III. i. 107-116)

これまで機知縦横、冷静そのものに他人と渡り合った Beatrice も、一旦恋心を抱くと、極めて情熱的な言葉で思いのたけをのべている。さらに注目すべきことは、散文ばかり語っていた彼女が、ここでは韻文を、しかも脚韻をふんで語っていることである。この作品では、韻文は主として Claudio-Hero の恋の世界で語られることを前にのべたが、Beatrice も恋

に落ち入るとすぐ韻文を語っているのは興味深い。また、この台詞には、恋と密接な関係のある鳥のイメージ——“Taming my wild heart to thy loving hand”⁽¹⁶⁾ が非常に効果的な役割を演じていることも見逃すことはできない。この場を境として、Beatrice の言葉が、今までの比喩に富んだ装飾の多い言葉から、心情をありのままに吐露する率直な表現に変わる⁽¹⁷⁾ことも指摘しておきたい。

次に、Benedick の言葉を見ることにしよう。まず、第一幕第一場における Beatrice との機知合戦を例にとってみたい。Benedick が登場して Beatrice を見た途端のべる言葉は、「おなつかしき高慢姫」(my dear Lady Disdain) であり、これを契機に二人の機知合戦が始まる。

Benedick. What, my dear Lady Disdain! are you yet living?

Beatrice. Is it possible Disdain should die, while she hath such meet food to feed it as Signior Benedick? Courtesy itself must convert to disdain, if you come in her presence.

Benedick. There is courtesy a turn-coat. But it is certain I am loved of all ladies, only you excepted: and I would I could find in my heart that I had not a hard heart, for truly I love none.

Beatrice. A dear happiness to women—they would else have been troubled with a pernicious suitor. I thank God and my cold blood, I am of your humour for that. I had rather hear my dog bark at a crow than a man swear he loves me.

Benedick. God keep your ladyship still in that mind, so some gentleman or other shall 'scape a predestinate scratched face.

Beatrice. Scratching could not make it worse, an 'twere such a face as yours were.

Benedick. Well, you are a rare parrot-teacher.

Beatrice. A bird of my tongue is better than a beast of yours.

Benedick. I would my horse had the speed of your tongue, and so good a continuer. But keep your way a God's name—I have done.

Beatrice. You always end with a jade's trick. (I. I. 113-138)

散文で始まる上の対話は、お互いの言葉を受け、間髪を入れず畳みかけられ、次第に速度を増して、言わば、「対話のダンス」と呼ぶにふさわしいリズム感に溢れている。しかし、こ

の「対話のダンス」でリードされるのは Benedick の言葉の方で、機知縦横の Beatrice の言葉に完全に敗北している。⁽¹⁸⁾ 例えていえば、「おなつかしき高慢姫」と言う Benedick の言葉より、その「高慢」という言葉を逆手にとらえ、「高慢が死ぬまして、ベネディックさんのようなお誂えむきの餌がころがっているのに。」と揶揄する Beatrice の言葉の方に、一そう機知のひらめきがうかがえる。つまり、Benedick の言葉には硬さがあり、含蓄が少ないのである。

いま一つその例をあげてみたい。第一幕第一場、Claudio から Hero についての意見を求められると、Benedick は次のように言う。

Why i' faith, methinks she's too low for a high
praise, too brown for a fair praise, and too little
for a great praise—only this commendation I can
afford her, that were she other than she is, she
were unhandsome, and being no other but as she is,
I do not like her. (1. i. 164-168)

この台詞には、“low”と“high,” “little”と“great”という対照法や、同一語 (praise), 及び同一構文 (too low for..., too brown for..., too little for...) の反復があるが、言葉は硬く、極めて平凡な内容を、わざとらしい技巧で表わそうとしている点が目立っている。

空虚な内容を大げさに表現する Benedick の言葉は、舞踊会での Beatrice の言葉を、Don Pedro につげる次の台詞で頂点に達する。

O, she misused me past the endurance of a block: an
oak but with one green leaf on it would have answered
her; my very visor began to assume life and scold
with her. She told me, not thinking I had been
myself, that I was the prince's jester, that I was
duller than a great thaw-huddling jest upon jest
with such impossible conveyance upon me, that I
stood like a man at a mark, with a whole army shooting
at me. She speaks poniards, and every word stabs:
if her breath were as terrible as her terminations,
there were no living near her, she would infect to
the north star…… Will your grace command me any
service to the world's end? I will go on the slightest
errand now to the Antipodes that you can devise to
send me on: I will fetch you a tooth-picker now from
the furthest inch of Asia: bring you the length of
Prester John's foot: fetch you a hair off the great

Cham's beard: do you any embassy to the Pigmies—
rather than hold three words' conference with
this harpy.

(II. 1. 222-252)

Benedick のこの台詞は、言葉の技巧や、誇張した表現に満ち溢れている。“huddling jest upon jest with such impossible conveyance upon me” や、“as terrible as terminations” のように、長い言葉と短い言葉を並列させる技巧はいうに及ばず、“Antipodes”, “furthest inch of Asia,” “Cham,” “Pigmies,” “harpy” という言葉が、見事な雰囲気を作り上げている。また、「解の木でさえ、緑の葉の一つでも残っていたら、黙って聞きすごしはしなかったでしょう。」とか、「仮面にまで血がかよい、あの女に食ってかかる。」とか、自分が「全軍の矢玉を一身に受ける標的番のようだった。」とか、「あの女の息にまで言葉同様毒があれば、北極星まで毒に染まる。」とか、「地球の裏側へでも即刻まいりましょう。」とか、「アジアのさいはてまで揚子を取りに行きましょう。」とか、「だったん王のひげを一本抜いてきましょう。」という Benedick の台詞から、彼がまるで誇張した表現の錬金術師のように感じられる。

以上、Benedick の言葉の特徴をみてきたが、二幕の終りで、彼が Don Pedro の計略に陥り、Beatrice をひそかに恋するようになると、その瞬間から彼の言葉に変化があらわれることは極めて注目に値する。一例として、第四幕第一場の、彼と Beatrice との対話をみてみよう。

Beatrice. You have stayed me in a happy
hour, I was about to protest I loved you.

Benedick. And do it with all thy heart.

Beatrice. I love you with so much of my
heart, that none is left to protest.

Benedick. Come bid me do any thing for thee.

Beatrice. Kill Claudio.

(IV. i. 282-288)

ここには、Benedick の例のわざとらしい技巧は影をひそめている。彼の話す言葉の大半が単音節語で、一語一語、力強いひびきがあり、率直な言葉の中に彼の誠実さがこめられている。

さて、恋に落ち込んだ Beatrice が、脚韻のある韻文で思いのたけをのべる台詞は前に紹介したが、Benedick も同じように脚韻を試みようとする。第五幕第二場、Benedick は歌を歌ったあと次のように言う。

I can find out no rhyme to 'lady' but 'baby,' an
innocent rhyme: for 'scorn,' 'horn,' a hard rhyme: for
'school,' 'fool,' a babbling rhyme...very ominous endings.
No, I was not born under a rhyming planet.

(V. ii. 36-40)

「女子」には「幼児」, 「嘲られる」に「寝取られる」, 「勉強」に「発狂」と, Benedick の脚韻は滑稽なものになってしまう。「歌よみの星の下に生れなかった」彼は, 恋をしても Beatrice のように韻文で語るができないのである。

(4)

最後に, 第三の物語, Dogberry 一味についてみてみたい。

M. C. Bradbrook は, Dogberry は, 音楽で言えば, “undersong” の働きをすることを指摘しているし, B. I. Evans は, Shakespeare が言葉の面で, Hero や Claudio よりも, Dogberry に力を入れている, とのべている。⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾

Dogberry は, *Love's Labour's Lost* におけるのろまの警保官 Dull を発展させたタイプであり, 「言葉の滑稽な間違い」(malapropism) をして, そこにおかしみが生みだされる。第三幕第三場, 無学の彼が難解な言葉を用い, 部下に質問する台詞をみてみよう。

Dogberry. First, who think you the most *desertless* man to be constable?

First Watchman. Hugh Oatcake, sir, or George Seacoal, for they can write and read.

(イタリックは筆者)(III. iii. 9-12)

“desertless” (失格な) は, “deserving” (適任な) の “malapropism” である。そのおかしさに加え, *Much Ado About Nothing* の舞台は Sicily 島の Messina であるが, ここにでてくる人物がイギリス人の名前であるのも滑稽である。その上, “Oatcake” が「安パン屋」, “Seacoal” が「石炭屋」で, その名がおかしみをましている。

さらに, 第四幕第二場, Dogberry が Conrade にむかって言う台詞には, 滑稽な間違いがいくつかあり笑いが生みだされる。

Dost thou not *suspect* my place! dost thou not *suspect* my years? O that he were here to write me down an ass! But, masters, remember that I am an ass; though it be not written down, yet forget not that I am an ass. No, thou villain, thou art full of *piety*, as shall be proved upon thee by good witness. I am a wise fellow, and, which is more, a householder, and, which is more, as pretty a piece of flesh as any is in Messina, and one that knows the law, go to; and a rich fellow enough, go to;

and a fellow that hath had *losses*, and one that
 hath two gowns and every thing handsome about him.
 Bring him away. O that I had been writ down an
 ass!

(イタリックは筆者)(IV. ii. 73-85)

Dogberry は無学のため冗語を用いたり、“malapropism”をおかしたりする。“respect” と言うべきところを“suspect,” “piety” と言うべきところを“impiety”と間違え、そこにおかし生みがみだされている。また、“which is more”の構文の繰り返しがあ、しかも、それがもっと大切なことをのべるのならばともかく、「役人」とか、「一家の主」とかいうつまらないことの言いかえに用いられている。また、警保官であるにもかかわらず、「金をたんまり持っている。」とか、「しゃれた身の回り品を持つている。」と吹聴するところが滑稽である。

次に、Dogberry 一味の言葉をみてみることにする。第三幕第三場、Dogberry の「みんな善良な正直者であらうな。」(III. iii. 1)という質問にたいして、Verges は次のよに答える。

Yea, or else it were pity but they should suffer *salvation*,
 body and soul.

(イタリックは筆者)(III. i. 2-3)

“domnation” と言うべきところを、“salvation” (救済) と言ったので、「霊肉ともに救済のうき目にあらう」というふうに意味が正反対になり、おかしみが生じている。

また、同幕同場、Conrade と Borachio を尋問する第一の夜番の言葉は次のとおりである。

We have here recovered the most dangerous piece
 of *lechery* that ever was known in the
 commonwealth.

(イタリックは筆者)(III. iii. 161-162)

「大陰謀」と言うべきところを「大淫乱」と言って滑稽な間違いをおかしている。

さらに、同幕同場、Conrade に「ねえ君たち……」(III. iii. 168)と話しかけられると、第一の夜番は次のように言う。

Never speak, we charge you,
 Let us *obey* you to go with us.

(イタリックは筆者)(III. iii. 169-170)

「同行」しなさいというのが「反抗」しなさいとなって、ここにもおかしみが生みだされている。

以上のように、第三の物語の人物たちは、無学のため言葉の本当の意味を理解せずにむづかしい言葉を用い、ここから笑いが生まれ、喜劇の世界が繰り広げられるのである。

(5)

以上考察を加えたように、*Much Ado About Nothing* は、言わば、言葉の交響曲から成り立っている喜劇である。韻文を語り、ロマンチックな恋の雰囲気醸し出す Hero と Claudio, 散文で機知合戦を繰り広げる Beatrice と Benedick, 言葉の誤用でおかしみを生み出す Dogberry 一味——この連中の駆使する言葉が、この喜劇を形成する三つの物語を互いに緊密に結びつけている。韻文で恋の世界を築きあげる Claudio と Hero の物語をたて糸にたとえれば、Beatrice と Benedick の物語は、はじめ散文の機知合戦で恋を軽蔑し、やがて相手に対する愛を自覚するや、韻文を——ときとしては脚韻をさえそなえた韻文を——試みようとする二人の心情の模様をつづり織るよこ糸のようなものである。これに“comic relief”として喜劇につきものの、伝統的なのろまのタイプ、Dogberry 一味という糸が織りこまれ、*Much Ado About Nothing* の“romantic comedy”というつづれ織りの世界をつくりあげているのである。

注

- (1) T. M. Parrott も *Shakespearean Comedy* (New York, 1949) の中で、“In fact a great part of the fun of this play comes from the spoken word; often, indeed, the action halts while we listen to a rippling stream of speech.” (p. 162) と言っている。
- (2) テクストは、A. Quiller-Couch & J. Dover Wilson (edd.), *Much Ado About Nothing (The New Shakespeare)* (Cambridge, 1923) を使用した。
- (3) W. Hazlitt, *Characters of Shakespeare's Plays* (World's Classics) p. 235
- (4) A. Quiller-Couch & J. Dover Wilson (edd.), *Much Ado About Nothing (The New Shakespeare)* (Cambridge, 1923) の第一場第一場の Notes (p. 110) の中に、“Up to l. 272 the scene is in prose; after that we have verse” とある。つまり、第一幕第一場の冒頭から Claudio が Don Pedro に恋心を打ち明ける直前の箇所までは、散文で書かれている。
- (5) M. Spevack, *A Complete and Systematic Concordance to the works of Shakespeare* vol 1 (Hildesheim, 1968) によれば次の通りである。

979 speeches	224 verse	752 prose	3 verse & prose
2787 lines	767 verse	2020 prose	35 split lines

なお、主な作中人物については次の通りである。

Claudio

125 speeches	40 verse	85 prose	0 verse & prose
288 lines	136 verse	152 prose	8 split lines

Hero

44 speeches	23 verse	21 prose	0 verse & prose
134 lines	102 verse	32 prose	3 split lines

Benedick

134 speeches	18 verses	115 prose	1 verse & prose
464 lines	43 verse	421 prose	2 split lines

Beatrice

106 speeches	12 verse	94 prose	0 verse & prose
298 lines	24 verse	274 prose	3 split lines

Dogberry

52 speeches	0 verse	52 prose	0 verse & prose
185 lines	0 verse	185 prose	0 split lines

- (6) M. Crane, *Shakespeare's Prose* (Chicago, 1951) p. 66
- (7) かつては朴訥な武人らしく、平明簡潔なしゃべり方しかなかった Claudio が、恋心にとりつかれている今、まるで修辞学者のようにしゃべるのを、Benedick は次のように批評する。
 “He was wont to speak plain and to the purpose, like an honest man and a soldier; and now is he turn'd orthography; his words are a very fantastical banquet — just so many strange dishes.” (II. iii. 17-21) Sister Miriam Joseph は、*Shakespeare's Use of the Arts of Language* (Columbia, 1947) の中でこれに言及して、“a sign that Claudio has turned poetic as a result of falling in love.” (p. 49) とのべている。
- (8) G. Wilson Knight, *The Shakespearian Tempest* (London, 1932) p. 89
- (9) W. Hazlitt, *op. cit.* p. 237
- (10) G. Wilson Knight, *op. cit.* p. 89
- (11) T. M. Parrott, *op. cit.* p. 164
 Mark Van Doren も *Shakespeare* (New York, Anchor Books edition, 1953) の中で、“*Much Ado* begins and ends with Beatrice and Benedick” (p. 120) とのべている。
- (12) A. Quiller-Couch & J. Dover Wilson (edd.), *Much Ado About Nothing (The New Shakespeare)* (Cambridge, 1923) p. 173
 また、M. M. Mahood は *Shakespeare's Wordplay* (London, 1957) の中で、“stomach” を、Shakespeare が最も多く用いる “Pun” の一つに数えている。(p. 51)
- (13) G. Wilson Knight は *The Shakespearian Tempest* (London, 1932) の中で、音楽や舞踊が、恋と密接な関係があることを指摘している。(p. 92)
- (14) Caroline F. E. Spurgeon, *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us* (London, 1935) pp. 263-264
- (15) 第二幕第一場、Don Pedro に Beatrice に “out o' question you were born in a merry hour” (II. i. 311-312) と尋ねると、彼女は、“then there was a star *danced*, and under that I was born.” (II. i. 314) (イタリックは筆者) と答える。また、第三幕第四場、計略にかかり、Benedick に恋心を抱くようになった Beatrice に、Hero が “Why how now? do you speak in the sick tune?” (III. iv. 38) と聞くと、“I am *out of all other tune*” (III. iv. 39) (イタリックは筆者) と答える。
- (16) 注の (9) を参照。
- (17) Benedick に愛を打ち明ける時の彼女の台詞、“I love you with so much of my heart, that none is left to protect. (IV. i. 285-286) や、Hero が Claudio に中傷されたことに対し、Benedick に “Kill Claudio” (IV. i. 288) と単刀直入に話す言葉にうかがえる。
- (18) Benedick は Beatrice の機知にかなわないとみると “keep your way a god's name—I have done” (I. i. 136-137) とやっている。

- (19) M. C. Bradbrook, *Shakespeare and Elizabethan Poetry* (Cambridge, 1951) p. 188
- (20) B. I. Evans, *The Language of Shakespeare's Plays* (London, 1952) p. 83
- (21) Dogberry の “malapropism” の他の例は次のとおりである。
- (i) “You shall *comprehend* all *vagron* men.” (III. iii. 25)
 (apprehend) (vagrant)
- (ii) “Comparisons are *odorous*.” (III V. 19)
 (odious)
- (iii) “our watch, sir, have indeed *comprehended* two *auspicious* persons. (III. v 49)
 (apprehended) (suspicious)
- (iv) “only get the learned write*k* to set down our *excommunication* and meet me at
 the goal. (III. v. 68) (examination)